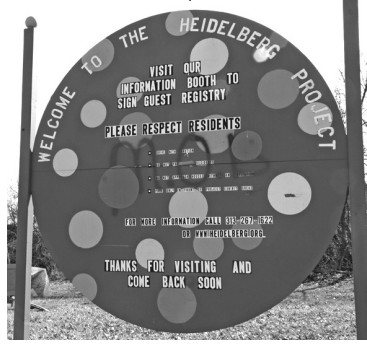


ハイデルバーグ・プロジェクトとデトロイト



“ハイデルバーグって何？”

ハイデルバーグ (Heidelberg) というのは、デトロイトのイースタンマーケットから約1マイル半ほど北東にある通りの名前です。西側を Ellery Street 東側を Mt. Elliott Street に挟まれたハイデルバーグ通りの両側のブロックと、それに面した Mt. Elliott Street の一画がハイデルバーグ・プロジェクトとして知られている場所で、ここを訪れる見学者の数は年間275,000人を超えるといわれています。デトロイト市内にある観光目的地の中では、デトロイト美術館とアフリカン・アメリカン歴史博物館の次に人気のある所。世界中のさまざまな国(約95ヶ国)からやって来る訪問者の中で、日本人は何と3番目に多いそうです。ちなみに、最多数はドイツ、2番目はイタリア。

“目ざわりなガラクタそれともアート？”

ハイデルバーグ通りを歩いてみて、まず、目につくのはいたる所に塗られた色とりどりのポルカドット(水玉模様)。それから、落書きみたいな原始的な顔。描かれた十字架、GODとWARという文字。履きつぶされた靴の山。雨風に晒されて薄汚れたぬいぐるみ。使い捨てられた電気掃除機、電話、オーブン、ボート、車のボンネット、錆付いた部品。そんな廃品ばかりを素材とした作品が、一見無造作に、でも極めて意図的に、空き地のいたる所に設置されています。



初めてここを訪れた人の最初の反応は「いったいこれ何? ガラクタだらけじゃないの? これでもアート?’’ではないでしょうか。でも、早まった評価をくださいな、もう少し時間をかけて見学してみてください。きっと、何か心に語りかけてくるものが見つかると思います。

「献身的な市民からなる少数のグループが世界を変えることができる。」そう信じて疑わなかったのは、人類学者のマーガレット・ミードでした。芸術を通して地域を変えよう、さらには世界中の人々にその可能性に気づいてもらおう、と地道に活動をしているアーティストがデトロイトにいるのをご存知でしょうか。

今回は、とてもユニークな芸術家、タイリー・ガイトン(Tyree Guyton)と彼のハイデルバーグ・プロジェクトをご紹介します。(Heidelberg Project, website: <http://www.heidelberg.org/>)

作品を見て疑問を持つ。それが作品との対話のはじまりだと思のですが、ハイデルバーグ・プロジェクトを訪れる人々は、この対話なしには帰れません。なぜ、タイリー・ガイトンはデトロイトのこの一画で創作活動を始めたのか? いつ頃から? 廃品ばかりを使うのはなぜ? 世間での評価は? 地域社会への影響は? プロジェクトの意味は? 作品が問いかけてくるものを受けとめる自分の姿勢、それに戸惑う自分、次から次へといるんな思いが浮かんでくることでしょうか。それを心のノートにメモしながらもう一度作品を見てまわると、以前見えなかったものが見えてきたり、また新たな疑問が生まれたり、さらには、今まで気づけなかった自分を発見したりします。芸術鑑賞の楽しみはこのプロセスにあるのだと思います。

“タイリー・ガイトンとデトロイト”

では、まず、タイリー・ガイトンはなぜデトロイトのこの一画で創作活動を始めたのでしょうか? その答えは、ガイトンが生まれ育ったデトロイトの今日に至るまでの歴史と切り離せません。彼が生まれた1955年の時代背景はというと、アイゼンハワーが大統領に就任したのが2年前の1953年1月。3年続いた朝鮮戦争が終結してから2年が経過。スターリン亡きあとのソ連との核兵器や宇宙開発をめぐる競争はさらにエスカレート。反共産主義路線のもと、米ソの冷戦続行。文学面では、ビートジェネレーションがポピュラーとなり、音楽はロックンロール。映画といえば、ジェームス・ディーン主演の『エデンの東』が封切られたのが1955年。やはりこの年、アラバマ州モンゴメリー市で、白人にバスの座席を譲ることを拒否した黒人女性に端を発したバスのボイコット運動が起こり、公民権運動がスタート。(この女性、ローザ・パークスさんはその後「公民権運動の母」と称えられ、デトロイトに移り住むことになりました。)

翌年の1956年、アイゼンハワー大統領の重要な業績の一つとされるインターステートハイウェイシステム法案が議会を通過し、国をあげてのフリーウェイ造りが本格化。他の大都市同様、デトロイトにおけるフリーウェイの発達は、経済的に余裕のある人々(主に白人とごく一部の裕福な黒人層)は市内から住宅事情や教育環境の良い郊外へと転居し、それ

筆者の経歴 Lancour 弘子

福岡市出身。国際基督教大学語学科卒業後渡米。ウェイン州立大学コンピューターサイエンス科卒業後、Blue Cross Blue Shield of Michigan勤務。現在、ウェイン州立大学院修士課程在籍中。絵画専攻。E-mail: hirokolancour@yahoo.com

ができない人々(主に黒人)は貧困化しつつある地区に取り残されるという弊害をもたらしました。その対策として、アーバン・リニューアル(Urban Renewal)と称した都市開発も行われましたが、市街地の空洞化を止めることは出来ず、街はしだいにスラム化。ガイトンが育ったハイデルバーグ地区も例外ではありませんでした。

インターステートハイウェイ建設は他の弊害も生みました。I-375(I-75から分岐したダウンタウンに繋がる約1マイルの区間)が1964年に開通する以前のその地域のことをご存知でしょうか。フットボール場のフォードフィールドがある辺りは昔パラダイス・ヴァレー(Paradise Valley)と呼ばれ、最盛期の1940年代は、ビリー・ホリディ、エラ・フィッツジェラルド、カウント・ベイシー、デューク・エリントン等の超一流の黒人ミュージシャンたちが集まるエンターテインメントの中心地でした。イースタンマーケットから南下し、ダウンタウンに向かってGratiot Avenueを横切ると住宅街に出ます。その一帯は昔ブラック・ボトム(Black Bottom)と呼ばれた所で、1930年代は、黒人がビジネス所有権を許された唯一の場所として繁栄しました。ブラック・ボトムとパラダイス・ヴァレーをつなぐ目抜き通りがHastings Street。昔この通りがあったところは、I-375の南方向Chrysler Driveになってしまいました。I-375の開通は、こうして歴史ある黒人地区を文字通り真っ二つに分断してしまっただけです。

1967年の7月、デトロイトのウェストサイドから始まった黒人の暴動は、イーストサイドに飛び火し、暴動がおさまるまでの5日間で、死者43人、負傷者1189人、そして7000人を超える逮捕者をだしました。この暴動は、デトロイトの経済状況をさらに悪化させ、小中企業や中産階級居住者のデトロイトからの脱出に拍車をかけました。そして、わが町が焼けるのを見たタイリー少年にも強い衝撃を与えました。ハイデルバーグ通りで1967という数字を目にしたら、この暴動のことを思い出して下さい。



“ハイデルバーグ・プロジェクトのはじまり”

子供の頃、おじいさんのサムから絵を描く楽しさを教えてもらったタイリー少年は、ハイデルバーグ通りで育ちました。大人になってからは、消防士、

自動車工場勤務、陸軍での兵役を経験。メリーグロブカレッジ、ウェイン州立大学、CCS(College for Creative Studies)などで美術も勉強しました。1967年の暴動以降、デトロイト市内の一部は麻薬や売春の蔓延する典型的なスラム街へと変貌。そんなハイデルバーグ通りの現状にたまらなくなったガイトンは、おじいさんのサムに励まされ、1986年、アートでわが町を変える活動を始めました。それがハイデルバーグ・プロジェクトのはじまりです。



ガイトン氏 Photo by Heidelberg Project

“なぜ廃品で作品を？”

ガイトンは、まず、あちこちに散らかっているガラクタを集めることから始めました。収集された廃品は、デトロイトにとり残された貧しい人々を象徴するものだったのかもしれませんが。リンチの犠牲者のように、木に吊り下げられた古靴。アウシュビッツのガス室を連想させる、オーヴンの中にぎっしり詰まった古靴。絵の具の混ぜ合わせ方で色彩が変わるように、同じ廃品でも並べ方や別の物との組み合わせによって意味が違ってきます。他の人には廃品に見えても、彼にとっては立派な存在価値のある素材だったのです。

ハイデルバーグ通りを歩くと、貧しい人々を使い捨てのゴミのごとく扱う社会風潮、戦争、人種差別や偏見に対する批判の声が、作品の中から聞こえてきます。でも、明日への希望に満ちた明るい声もその中に混じっています。たとえば、色彩と多様性を祝福するような作品の数々。ポルカドットの家(The Dotty Wotty House)や、動物のぬいぐるみを山のように積んだポルカドットのボート(Noah's Ark)。このカラフルなポルカドットの由来は、ペンキ塗りが仕事だったサムおじいさんの大好物だった砂糖菓子にあります。おじいさんの家に遊びに行くと、いつもジャーンの中に入っていたのが色とりどりのジェリービーン。「人間はまるでジェリービーン。みんな同じようできて、人それぞれ違う。色も違う。だけど、この地球という同じ器の中の隣人同士じゃないか。」そんな思いからポルカドットのモチーフが生まれました。



Dotty Wotty House

“美術界での評価”

私が最初にガイトンの作品に触れたのは、十数年前のデトロイト美術館(DIA)。Caged Brain(籠の中に閉じ込められた脳)という題の1990年の作品で、翌年DIAに買い上げられました。廃品となった鳥かごの中に、古ぼけた布製のロープがまるで脳味噌のようにぎっしりと詰まっていた。「ガイトンの作品は、モダニストの伝統であるファウンド・オブジェクト(found object)を基盤にしている…鳥かごとロープという、どこにでもあるようなこの2つの廃品の組み合わせによって、抑圧された都会の経験をよく表現している…」という評がDIAのガイドブックには添えられています。コレクションの総額がアメリカの地方自治体所有の美術館の中で2位といわれるDIA。そんな一流の美術館で蒐集されるほど彼の作品は評価されているのです。

去年の9月には、ヴェニス建築部門のビエンナーレ展に、アメリカを代表するプロジェクトのひとつとして、ハイデルバーグ・プロジェクトも参加しました。この5月には、イタリアのFree University of Bolzanoでの講演に招待されているとのこと。そして、ミシガン州ジャクソン市にあるElla Sharp Museum of Art and Historyでは、ただ今“Street Sense:Tyree Guyton”と題した個展が5月23日まで開催中です。詳しくは、美術館のウェブサイトwww.ellasharp.org/index.htmlを。さらにまた、ノースキャロライナ州シャーロット市にあるMcColl Center for Visual Artでは、3月末から5月16日まで、“Tyree Guyton: An American Show”が開催中です。

“NPO ハイデルバーグ・プロジェクト”

ハイデルバーグ・プロジェクトはガイトンの作品であるばかりでなく、デトロイトの地域を基盤とした、芸術を通して人々に力を与える非営利組織(Non Profit Organization)でもあります。NPOとしての使命は、そこで暮らす人々の生活向上やコミュニティの環境の美化と保全によって地域を変えていく、そして、芸術的表現を手段としてその援助を行う、ということです。その一環として、地域の小学校でアートの課外授業をしたり、コミュニティーガーデン、彫刻ガーデンを学校の遊び場にするなどの活動をしています。NPOのイグゼクティブ・ディレクターは、ジニーさん(Jenene Whitfield)。彼女はガイトンのエージェントでもあり、良き伴侶でもあります。



“地域社会への影響”

ハイデルバーグ通りからクラックハウス(麻薬の売買や使用のために用いられる家)がなくなりました。ガイトンが廃屋を作品に変えてしまったのと、通りを訪れる見学者が増えたため、犯罪数も減りました。ポルカドットハウスの隣には、96歳の老人が今も一人で住んでいるそうですが、それができるのも、プロジェクトのおかげでこの付近が安全になったからです。ハイデルバーグとEllery Streetの角には農家まで出現。類は類をよぶ、と言いますが、ガイトンの芸術活動に共感をもったアーティストたちが集まりつつあります。彼の友人ティム(白人)は奥さん(ヒスパニック)といっしょ、ハイデルバーグ通りに引越してきました。この一帯を人種や階級を超えたみんなが集まれる文化村(Cultural Village)にしようという計画もあります。

恒例のサマーフェスティバルは2年毎に行われますが、残念ながら今年はその年ではありません。昨年のフェスティバルには、郊外、州外、国外からも多数の参加者があり、地域の子どもから大人まで自分達も楽しみながら訪問者を迎えました。前にも述べましたが、ドイツ人のハイデルバーグ・プロジェクトに対する関心は強く、去年のフェスティバルにはダイムラーファイナンシャルのCEOクラウス・エンテンマン氏も見学に来られたそうです。

ハイデルバーグ・プロジェクトが始まった頃の人々の反応は様ざまで、「近所迷惑だ」「目障りだから取り壊せ」という批判もあれば、「表現の自由だ」「おもしろいじゃないか」といった好意的意見もありました。デトロイト市の行政当局は、1991年と1999年の2回にわたり、廃屋や空き地を利用したハイデルバーグ・プロジェクトの取り壊しを決行。しかし、始めてから23年経た今日も、ハイデルバーグ通りには、アメリカ国内はもとより世界中から見学者が絶えません。“We can change the world through art.”という彼の声はデトロイトから世界へと拡がりつつあります。

“見学してみたい？”

見学は無料。4月から10月の間、週3日(金、土、日曜)の晴れた日には、ハイデルバーグ通りの中間地点に見学案内の野外ブースがオープン。作品の説明と付近の航空写真が載った親切なガイドマップ(\$10)が売っていますので、それを見ながら個人で自由に散策を。ハイデルバーグ・プロジェクトNPO事務所は離れた所(3360 Charlevoix Street)にありますので、御用のある方は電話でどうぞ(313-267-1622)。なお、見学の際は、ハイデルバーグ・プロジェクトの数ブロック先は治安の悪い所ですのでお気をつけ下さい。

今回は、ガイトンさんとのインタビューを予定していますので、お楽しみに。

* 1部資料・情報提供はHeidelberg Projectの協力によります。